四百メートルのシカチャン

杉藤二郎

〈リベーロ〉（一九七四・二）の戦後アナキズム運動史年表（一九四六～一九四八）を見ると、アナキスト連盟でも、解放青年同盟に協力していたようであるが、これ等の記事は甚だ少い。

当時は、全国的に解放部落が立上り、どこの地域においても、講演会やデモが行われ、警察もこれには手を焼いていた。

私も一九四六年末、部落の人達と昵懇に結ばれていた。一例をあげるなら、こんな思い出がある。

たしか、一九四六年の秋だったと思う。

麻生吉隅炭鉱の運動会が、桂川小学校のグランドを借りて行われた時の事である。通称シカチャンの名で通っている、解放部落の中田鹿夫という青年が、四百米競走で一着になった。その時あがった歓声は、会場一ぱいに広がり、しばらくは拍手の波がやまなかった。

なぜ、そのような拍手が起きたかというと、二百米ぐらいまでは、先頭から五、六番目にいたシカチャンが、そのあたりから次第に速力を増し、三百米では、トップにおどり出た。それから、集団との間隔を次第に拡げ、ゴールに入った時は、三米以上も引きはなしていた。

わずか百米の間に、これだけ離すことが出来るのはシカチャンにしてみれば、かなり自信があってのことだろうが、見ているものにはわからないので、疾風のように駆け抜けていく脚の運びを、観客は、まばたき一つせずに見守っていたのだ。一番先頭に出た時に起きた歓声は、ゴールインまで止まなかった。

この中田鹿夫は、福岡県嘉穂郡碓井町の部落に生れた好漢である。全部で三十戸ほどの部落であるが、〈特殊部落〉として世間からは対等の付合いをしてもらえなかったので、この部落を訪れる人はまずなかったといってよい。

そこへ私が平民新聞を持って、売りに行ったのだから一苦労であった。最初のうちは、スパイでもあるように警戒され、道行く人によびかけても、答はおろか、顔をそむけられたものである。新聞など見ようともしない。振り向きもしないと言った方が本当であろう。

それでもこりずに、私は毎日、仕事が終ると、その部落へ出かけて行き、時には大声をはり上げて、平民新聞

の記事を読んだり、時局を批判したり、人間の平等を説いたり、文字通り懸命に努力した。

私が部落通いをはじめてから、五日目のことである。集ってきた子供達に、炭坑で配給になった砂糖を、少しずつなめさせた。これはてき面に効果を上げた。何しろ、当時、砂糖は貴重品で、子供の舌にも、めったにのせられないものであった。その砂糖がもらえるとあっては、大人どもも関心を示し出した。

その中に、私は鹿夫を求めたが、彼は仕事に出ていて、見つけることができなかった。しかし、日ならずして、私は鹿夫と話し合うことが、できるようになった。

私の家の隣りに住んでいる人が部落出身であることを知り、その人に紹介をたのんだのである。

最初、鹿ちゃんの家を訪ねた時、どこからか帰ったばかりの彼が、まだ門口に立っているところであった。私は、平民新聞を一枚渡し、「どうか読んで下さい」と言った。鹿ちゃんは私を知っていたらしく、ごくあっさりと受取ったが、「僕は学校へも行かなかったし、難かしい事はわかりませんが、ゆっくり字引をひきながら、読ませてもらいます」と答えた。

家の中には、年老いたおばあさんが一人居て、鹿夫の顔を見るなり、「どこへ行ってきたか」と、どなった。

私が鹿夫の後について、上にあがると、おばあさんが、汚れた湯呑み茶わんに、お茶をついで出したので、私は何気なくそのお茶をいただいた。

部落では、出されたお茶を飲む事が、親しい友情を示す事であると、後日鹿夫から聞いた。私の行為は、無意識であったが、誠に当を得ていたと言える。

それから、鹿ちゃんの案内で部落中を歩きまわり、平民新聞を売ることができた。

中でも、当時町長をしていた秋田氏が、部下を使って宣伝してくれたので、一そう新聞がさばけるようになり、とんとん拍子で、部落の人達とも仲よくなり、往き来もするようになった。

私が、吉隅の組合長、麻生連合の副会長にまで押し上げられることになったのは、この人達のおかげなのである。

一九四七年、私が組合長になってからは一そう同和事業に力をそそぎ、部落の人達から何事によらず相談を受ける事になった。縁談も二三まとめたが、親子の争いや、就職の事など苦労もさせられた。

もう一つ、部落の一角に住付いた朝鮮人とも友達になり、言葉や文字の交換勉強と共に、平和についても話し合って、これは私の、生涯の願いであり生甲斐でもあった。

たが、今日なお、いくつかの言葉を話すことができ、チョンゴシ、アボジでありたいと、常に願う毎日である。

さて、本論に戻るが、新平民運動は同和運動となって、地方自治体も予算を組むようになり、地域（部落）地域に公民館（同和会館）を建てた。どの会館の落成式にも必ずといってよい程、招待状が来たので、私も一角の名士になったものだと、正直のところうれしかった。

（一九七四・一〇・二一）

イオム雑記

メモ二件

寺島珠雄

（1）小作人社の跡

資料館の気ままな散歩のようだとまた言われるタネと承知で、ちょっとここにメモを提出する。

古田大次郎が「小作人社」という小結社を作っていたことはよく知られている。黒色戦線社が復刻した『死刑囚の思ひ出』の二六ページ以降にその記述がある。それによると古田は、渡辺善寿、長島新と三人で「小作人社」を作り、一九二二年一月末（？）に雑誌『小作人』を東京で発行したのち、二月はじめに埼玉県の蓮田へ三人で引越している。

少し引用する。

――農村運動と云ふからには、田舎に居据った方が本当だといふので、渡辺が家を探しに出た。金は拾円しかなかったが、田舎なら家賃の五円も出せば相当なのが借りられる。渡辺は埼玉県の蓮田といふ駅のすぐ近くに、商店向きの六畳二間の家を見つけて来た。村の名前は綾瀬といふ、一寸賑かな所だった。僕達は早速引越しをした。

この蓮田の小作人社に、中浜哲があらわれて同居する一方、警察の監視もきびしくおこなわれ、運動らしいことは何もできないうちに小作人社は解散ときまる。その情況は次のように書かれている。

――六月四日の晩、最後の思ひ出に、この家で講演会を開いた。聴衆は一人も来なかった。講演者として、東京から呼んだ五六人の同志が、弁士即ち聴衆となってゐた。

何とも寂寥としたものだが、想像するのがむつかしいということはない。似たような光景がいまでもある。

私が提出しておきたいメモは、そんな具合に、短期間の、看板だけの小作人社があったその家が、いまはまだあるということで、それを知らせてくれたのは、去年神戸から蓮田（現在は市）へ移ったM・Yさんである。

以下、M・Yさんの蓮田移転に際して、ひまがあったら調べてもらえまいかと頼んだ私への二回の返信から抜き書きする。

――（第一回分から）つい最近、板碑の拓本をとる会で、古田大次郎たちの小作人社を覚えている人に出会いました。家のだいたいの場所も確認しましたが、当時は綾瀬村だったようで、正確な住所名と家主の名は、その方が調べてくださるはずです。判り次第お知らせします。昭和初期、軒先低い家並も今は国道122号線の最大のネックとなり、歩行も困難な有様です。黒浜（Mさんの住所）でも当時は小作人争議が続発していたと、その老人は話していましたが、家主なる人物の卒直な受けとめ方を聞いてみたいものです。生きていたらの話ではありますが……

――（第二回分から）いまのところ判っているのは、家主は長谷部一（はじめ）であろうということ。当時の大きな土地持ちであり、今は代替りしていて長谷部武の貸家（？）になっているらしいこと。駅から二分ほどのところにあり、吉川豆腐店があったのですが、今現在つるや食堂仮店として看板がかかっています。土地登記の面でややこしくて、二人の持主がいて問題を起しているらしいのですが、古田大次郎達の借りていた二部屋の中、まだ一部屋は残っているとのことでした。（中略）当時子供だったという人の話では、大きな男達が毎日何もしないでブラブラしていたという印象を持っているとも話してくれました。子供にとっては、大人はみんな大きく見えたでしょうし、勤めを持たぬ若者の姿は、田舎ではさぞ異様だったことでしょう。

（2）石川さんの芝居

石川三四郎訳の『悪指導者』という芝居（ミルボオ原作）が、一九二七年の秋に築地小劇場で上演されたことは記録で知っていた。しかし石川さん訳の芝居が太平洋戦争敗戦後の大阪で上演されたのは、こんど偶然手にできたプログラムではじめてわかった。無論、はじめてというのは私としてはのことで、すでに知っている人にとっては何をいまさらだろうが。

一九四七（昭和22）年二月二日三日の両日、大阪中之島公会堂でおこなわれた知性座という劇団の小公演が、アルフォンス・ドーデー原作、石川三四郎訳の「アルルの女」（三幕五場）を、改修道井直次、演出立原幹夫でやっている。一日二回計四回上演で会員券は税共五円である。

この時分だと、私は石川さんのお宅へ何回か行っているのだが、大阪でぼくの訳した芝居をやるとかやったとか、そんな話はどうも聞いたような気がしない。当時の平民新聞にもそんな消息はなかったと思う。

それで、別にいまさら改修の諒解がどうこうというのでなく、ただ事実として石川さんとの連絡はどうなっていたかを近藤計三君を介して道井直次氏に問い合せているが、回答を待っていると〆切りをすぎそうなので、ともかく石川さんの訳した「アルルの女」が上演されたことだけ書いておくことにした。

尚、知性座という劇団は一九四六年六月九日に大阪で創立総会をおこなっているが、その演出助手に名をつらねている川崎八郎氏は、ここ数年来、私や向井孝がしばしば飲みに行く「八兵衛」という店の主人で、なんとなく古いアルバムを見せてもらっているうちに、石川さんの名が出てきたのだった。

ついでだから、「アルルの女」のスタッフと出演者名を記す。誰かが知っている名を見つけることもあろうと思って。

改修道井直次、演出立原隆夫、装置相馬英郎、舞台監督浜吉弘敏、照明杉山久美男、効果村田康雄、出演（役名省略）松永通温、道井直次、美山恵美、佐々礼子、林晶子、作間芳郎、牧野宗也、川上辰夫、小柳史子、浜本俊介。

（75・1・27）

イオム雑記

芳情便りから

河本乾次

竹島昌威知、寺島珠雄編集の詩誌『鯤』が、何号か、発刊された。この詩誌に、『イオム』同人の向井孝、山口英、高島洋たちの詩も載ったので本誌とは無縁ではなかった。『鯤』という珍しい題名について、向井さん、寺島さんからのお便りに、断片的に御教え受けたものに、他から聞いたことなどミックスし、それを簡明に記して

みた。

「鯤は、支那に伝わる話である。〈白髪三千丈〉式の、中国流の表現で書かれている人生哲学の寓話である。

北冥に、鯤という魚が、いる。頭から尾まで何千里もあるという怪魚。この鯤が、鵬という鳥に変身する。強い風が吹き、海が荒れる季節になると、南冥に向って飛び立つのである。南冥は〈天の池〉という楽土である。

鵬の胴体も三千里とか、翼をひろげて飛び立ち、九万里の高さに舞い上がり、南冥まで、六ヶ月間という時間を休むことなく飛びつづけるとのことである」

このとてつもない話の題名を詩誌につけるのが詩人の真骨頂のようである。

山口英さんは、かつての『イオム』の集りで、詩はそこらにある雑文と違って、宇宙間の広大無辺の森羅万象をとらえている遠大な哲学であると説明されたのであった。

* * *

本誌3号に、拙文の「雑感―大杉虐殺五十年―」の中に、「…大杉は何んの事件で入獄したときか…」「…小田知一の蔵書印…」この二つに、安谷寛一さんから御教示の便りがあった。

「尾行殴打事件である。これは三ヶ月の刑にきまっていたが、控訴して、大杉は、野枝が次女エマを生んで、用件がすんだので控訴をとりさげ、豊多摩監獄に三ヶ月入獄し、三月に出てきたときである。

小田知一の蔵書印は、当時、神戸のロンダにあった『平民主義』を、小田知一が持ち出し、自分の判を押したもの、それをまたロンダにとりかえしておいてあった。それを大原社会問題研究所の森戸辰夫氏にたのまれて永久貸与（五円か、十円で売った形）、その受取書に〈御入用の節はいつでもおかえします〉の一札が、今も、私のところにあります。」

* * *

本誌5号に、拙文の「大正時代の大阪」の中に、「…大阪市庁舎の窓から、街頭に立つ夕刊売りの少年の姿を眺めていた理事者…」について、安田恵治さんから、御配慮の一文を戴いた。

「ちょっと方面委員（民生委員）制度を初めた人のことについて一言申します。大正七年、当時の林市蔵大阪府知事が、大阪淀屋橋南詰東入る南側の理髪屋で髪をかっているときに、鏡に新聞売り母子の姿がうつった。林知事が、それを見ていて方面委員制度を考えついたということです。たしか〈有馬〉とかいう理髪屋で、当時一般は、三十銭、五十銭程度だった理髪代が、この店は壱円とる高級理髪店だと思います。林知事は、昭和二十七

年逝去、現在淀屋橋南詰西入る浜側に、林市蔵の像が立てられており、このこと（方面委員制度創設のこと）が、石にほられていますが、黒い石で読みにくいです。

あなたの「大阪市庁舎の窓から」でなく、「林府知事が理髪屋で」というのが正しいようです。大正七年には現在の場所に市庁舎はありませんでした。出来たのは大正十一年か十二年、大正七年は中之島公会堂が建築中でした」

* * *

「鯤」のことについては、向井さん、寺島さんから、詩については、山口さんから御教え戴き、「イオム」誌上の拙文の誤ちには、安谷さん、安田さんから懇切な御教示の書面を頂戴し、諸氏に厚く感謝し、私の調査不充分を、読者に深く御詫びいたします。

イオム7号

合評会の記

7号合評会は12月15日、午後2時頃からサルートンにて開かれた。参加者十数名。

合評会と忘年会を併行してやり、酒も入っているということもあったが、議論を議論として遊んでいるような印象が強かった。7号から印刷所も変り、表紙も大幅にイメージ・チェンジをしたが、内容についても合評会の記というよりも、私の印象深い所を抜き書き的に書いてみます。

表紙については、少し硬い感じがする、全体の配列がつまり過ぎ、6号までの方が良い等、個人の美的イメージの相違にもより賛否両論となり、結局は編集者に任せるということで一件落着。

☆

〈交流会報告〉〈相沢尚夫講演会〉等、多少変化しました。7号はページ数も増え内容の方も、多種多様なので

＊ヨーロッパの旅・5／平山房子

シシリー行きのホームの事等、状況が良く表現されていてとても面白いが、5回連載されていても、現地のグループや個人の運動実態、理論的傾向等の私達がもっとも興味を持っている部分に触れられていないのが残念です。

＊労働と職業／日野善太郎　著者より最初に、7号では労働、8号では職業に分けて、8号で本質的な事に入るという説明があった。7号に限らず毎回次号で本質的な事を述べるとばかり言って、問題点の引延し

をするという手きびしい批評がまずあった。「導入までの文章が長すぎる」「例をあげて説明しているので説得力はあるけれど、少し押付けがましい所もある」等々あいついだ。まず「労働」の意味づけが問題となった。著者は、生活の為に汗を流して作る事が労働だという。しかし生活の為とはいえ上司から命令されて仕事をしているのは労働とはいわないのか？　では気軽に私は労働者ですといっている人達は何者なんだろうか。この辺で議論が混乱して、労働についての意味づけは出てこなかった。私は現在資本主義の中において、労働も職業もないと思う。ただいえるのは、少さい時から資本家（企業）に買い・・・慣らされているのにすぎなくそれに気づいているかいないかの違いだけだと思う。著者から、労働と職業の相違を徹底的に書くという発言があったので、期待しよう。

＊交流会報告　今までのイオムとは異質だという意見もあったが、マンネリ化しつつあるイオムから少しは良い方向に展開する一歩だと私は思う。過去の運動と平行して、現在まさに実践的に運動しているその事実は、誌面を利用してどしどし記載していくべきだと思います。今回は報告だけで終ってしまったのは残念だけれど、地域的問題、情報紙、連絡機関等解決しなければならない諸問題は残されている。

＊平民大学講演会／河本乾次　前号までは随筆風の文章が多かった。本号は理論的にもまとまっていて無駄のない文であると思います。

＊挽歌／山口英　詩人（？）山口さんも久々に出席したので、掲載の詩についてわからないこと等を聞こうという事だったけれど、結局今までどおり、読者が感じる処があればその詩は良い詩だという事になった。

＊憎悪／高島洋　高島さんは詩集その他の詩誌に労働や日常をうたった詩を沢山書いているが、その中でも〈詩〉としては一番欠点が出ているという意見が多かった。「日常会話が多すぎる。」「詩の深みがない」等々。

＊〈日本無政府共産党〉講演会
7号に記載されているように、無政府共産党が出来るまでの、当時の社会的状況は大まかに分った。しかし党内部における組織的なつながり、その他重要な問題点を聞くまでにはいかなかった。例えば〈摩耶山事件〉昨日までの同志を殺さなければならない、その辺の組織と個人、個人と個人の感情的なものまで含めてのつながり等を詳しく聞きたかった。運動が活発になれば当然この様な問題点も出てくるのだ。いかに良い方向へ運動を進めていくか、今後の討論における課題だと思います。（K）

※（60ページから続く）　べきだ」と言う。共産党の連中も、無期組みがいっせいに解放され、そうした親近感から一時的な感傷的接近があったのは、あの場合考えられる。筆者は、その話にはいきなりには乗れなかった。それよりも、〈コンミューン経済研究所〉というか、優秀な少数のひとたちに協力してもらって、コンミューンの起るべき諸問題とその解決方法、プランの立案など、積極的に備えることが当面の仕事ではないかと思ったので、かれに語ると、よし！カネのことは　にまかしておけ、と例のとおりだったが、結局、それを運営するには、かなりな費用を要するので、船はついに出帆することができないままである。

野坂が中国からかえってきた。熱狂するさわぎだった。早速、アナ、ボル共同路線で、野坂の親迎会場で、岩佐作太郎が何番目かに親迎の辞をのべることに打合わせがきまっていたが、日共の連中が野坂を十重、二十重にかこみ、共同路線もクソもない。岩佐の出る幕はなく、これをシオに、共同路線も崩壊したかたちと聞いているが、これは、しかし、アナキズム運動にはよい教訓であった。二見の、よく言えば創造的精神は尊重すべきだが、内容的に鍛練されないかぎり、それはひとつの〈おもいつき〉に過ぎないだろう。党の問題についても、〈山に入るものは山を見ず〉であってはならない。しかし君はもう裂裂にはいない。この言葉を君の冷いむくろにささげよう。（完）

アナキズム紙誌紹介

リベルテール　月刊　東京都練馬区大泉学園町二一九〇　萩原方　リベルテールの会

アナキズム　季刊　静岡県富士宮市杉田二五一　CIRA NIPPON気付

黒の手帖　不定期　東京都新宿区北山伏町三三　大沢方　黒の手帖社

リベーロ　月刊　京都市左京区田中門前町二八—五　リベーロ社

無政府主義研究　季刊　東京都豊島区高田三—三八—二三　高田ハイツ二〇六　玄曜社

編集後記

◎8号をお届けします。発行予定が大巾に狂い、約一ヵ月の遅延をお詫びします。毎号こんな風に遅延が続くと何となく白け、折角編成した編集部もその機能を十分に発動することなく終りました。次号からは汚名を拭うべく努力いたします。

◎イオム編集部設置は8号の編集過程の途中であったため、ほとんどその働きをしませんでしたが、次号からは編集部による編集を実施させます。また約六〇頁・二五〇円を固定化させたいとも考えています。

今後ともよろしくご支援ください。

◎旧「農青社」の宮崎晃さんから「日本無政府主産党への批判」が寄せられました。7号所載の「日本無政府共産党／相沢尚夫講演会」に対する反響として、編集スタッフは喜んでいます。さらに私たちは「無政府共産党」を知らない若い世代の、アナキストの組織に関心を抱く人たちからの意見も期待したいのです。「無政府共産党」に対する批判にとどまらず、アナキスト組織に関する諸意見をきかせてください。アナキスト組織に関する討論が展開できたらというのが本意なのです。

◎「神戸共同文庫」というのができました。イオム会員の多くがこれに参加しています。それに関する詳細は現在2号まで刊行されている会報をご覧ください。（前）

◎イオムもこれで8号、三年目に入った。イオムの会の同人誌として発刊され、会員の、また会員外の人も寄稿を通じて、その発表の場として機能してきた。しかし会としては会員が地域的に分散していることもあり、一号につきせいぜい一～二回の会合で発行の打合せ、作品の合評をし、あとは寄せられた原稿を編集し発行するだけだった。会員同士の関係も、会の活動としては事実上、発表の場を共同で確保する関係にとどまり、会としての積極的な活動が十分展開されないできた。自由連合は空虚なものにとどまり、集合力は発揮されないできたといわざるを得ない。イオムも同人誌として更年期をむかえた感がないではない。イオムの発展を考え、今後共同企画、特集等の活動を展開すべき段階に立致ったのではないだろうか。（谷川渉）

× × ×

× × ×

イオム8号へのご意見・ご希望等お寄せください。今後の参考にさせて戴きたいと思います。